

## 共時的観点からみた動詞派生前置詞*including*の文法化

林 智昭\*

### A Synchronic Perspective on the Grammaticalization of Deverbal Preposition *Including*

Hayashi Tomoaki\*

#### 要 旨

*concerning*や*considering*などの動詞派生前置詞(秋元 2014: 49)は、通時的には現在分詞から発達した文法化現象とされる。本論文ではそのような動詞派生前置詞の一つである*including*を取り上げ、それが動詞派生前置詞へと至る連続的なカテゴリー変化(文法化)を、(i)前置詞への置換テスト、(ii)等位接続テスト、(iii)強意副詞*right*との共起、(iv)(間)主観化(Traugott 2003)、(v)前置詞的副詞、の観点から考察していく。『リーダーズ英和辞典』『ジーニアス英和大辞典』やOxford Dictionary of English (ODE)等を見ると、*including*は*excluding*の対義語となる「前置詞」と分類されている。しかし、Oxford English Dictionary (OED)では、当該語は「前置詞」と分類されていない。本研究ではまず、先行研究の記述を踏まえた語法分析の結果から、文法化に伴う意味の漂白化が生じていると考えられるものの、*including*は動詞*include*の意味を依然として強く保持していることを示す。さらには、〈除外〉の意味を表す前置詞(*but, except, without, barring, excluding*)とは異なり、類似した意味を持つ前置詞が複数存在しないという唯一性を持つ点で特徴的であることを指摘する。その上で、当該語が「書き言葉」だけに限らず広く使用されるという事実を、大規模コーパスCorpus of Contemporary American English (COCA)のデータを用い、アメリカ英語を母語とする話者の内省により検証する。

キーワード：動詞派生前置詞、言語変化、文法化、前置詞性

#### Abstract

Deverbal prepositions such as *concerning* and *considering* (Akimoto 2014: 49) are said to have diachronically undergone grammaticalization from present participles to prepositions. In the present study, we focus on prepositional *including* as one of such cases, and explore its synchronic uses. In order to reveal to what extent *including* has undergone gradual change in the word-class from a verb into a preposition, data collected from large-scale corpora are examined from a number of perspectives such as (i) the substitution test, (ii) the coordination test, and (iii) the intensifier *right* co-occurrence test, and (iv) grammaticalization (Hopper 1991; Hopper and Traugott 2003) and (inter)subjectification (Traugott 1989, 2003), and (v) adverbial usage, through the introspection of native speakers. From these considerations, we argue that the deverbal preposition *including*, compared with prepositions describing 'exclusion' such as *but, except, without, barring, and excluding*, is unique in that it slightly involves semantic bleaching, thus retaining quite a number of properties originating in *include* as a verb. In

\* 名桜大学国際学部 〒905-8585沖縄県名護市字為又1220-1 Faculty of International Studies, Meio University 1220-1 Bimata, Nago City, Okinawa, Japan, 905-8585

addition, we show that *including* is not only used in written texts but also in spoken and Internet communication.

**Keywords:** deverbal prepositions, language change, grammaticalization, prepositionality

## 1. 序論

言語研究において、通時的な言語の変化を捉えることは多くの研究者にとっての課題である。20世紀の伝統的な言語学では、Jespersen (1954) をはじめとする伝統文法や、構造主義言語学においても膨大な言語データに基づく丹念な研究が行われてきた。その中でも、文献学的なアプローチは代表的なものと考えられる。近年では、大規模コーパスの整備によって、膨大なデータを統計的に処理することが可能となりつつある。その一方で、データ処理技術が発達しても、言語分析においては分類が難しいものが存在する。品詞分類に関しても同様のことがいえ、一例として *concerning*, *considering*, *regarding*, *relating to*, *touching* 等、いわゆる「動詞派生前置詞 (deverbal prepositions)」(秋元 2014: 179-191; Fukaya 1997; Kortmann and König 1992) と呼ばれる現象が挙げられる。これらの事例は通時的には動詞に由来し、(上記の動詞派生前置詞の多くが「関連」の意味をもつように) 類似した意味を持ちつつも、個々の語彙的な意味・用法に注目すると異なる分布を示すのに加え、通時的な発達過程も様々である (cf. 児馬 2001: 75)。従って、これらの前置詞化 (文法化) を捉えるためには、児馬 (2001) も指摘するように、個別事例の研究を行うとともに、現象全般に共通する特徴も考察していく必要がある。

本論文の目的は、動詞派生前置詞のうち、現代英語における *including* の記述研究を行うことである。*including* は、動詞派生前置詞の中では動詞 *include* の意味が強く保たれており、「除外」の意味をもつ前置詞 (*except*, *barring* 等) が複数存在するのと比較して、複数の類義語が存在しないという点で非対称性と唯一性を持つ。本論文では、通時性との接点を念頭に置きつつ共時的観点から分析を行い、言語変化との接点を探っていく。

本論文の構成は以下の通りである。まず2節で、本研究の理論的背景および文法化現象の概観を行う。続く3節は事例研究であり、*including* に関する先行研究の議論と辞書等の記述を概観する。その上で、コーパスのデータと先行研究における種々の作例により検証を行い、用法を記述し、動詞・前置詞の間で揺らぐ品詞カテゴリーの曖昧性を文法化の観点から考察する。最後の4節が結語である。

## 2. 先行研究

本節では、本研究の背景と、文法化の理論的背景、分析の対象とする動詞派生前置詞の特徴を概観する。3節の事例研究では、ここで述べる枠組みと研究の手法を援用しつつ、*including* の振る舞いを検証していくこととなる。

### 2.1 本研究の背景

本研究は、通時的に動詞に由来する語が意味変化に伴い前置詞への連続的なカテゴリー変化を果たす、という動詞派生前置詞への文法化 (Hopper 1991, Hopper and Traugott 2003) を論じる。意味変化の研究は、理論言語学の中でも特に意味論・語用論をテーマとする認知言語学 (山梨 2000, Taylor 2002, Langacker 2008) が主眼とするテーマである。認知言語学は、理論的枠組みとしては構文文法 (Goldberg 1995, 2019) と親和性を持つ。「構文」という語は、構文化 (Traugott and Trousdale 2013) 研究の枠組みにおいて、通時的な分析例を交えつつ文法化および語彙化を含む理論的定式化が行われた。Hilpert (2014), 大谷 (2019) においても、Goldberg (1995) や関連研究との検討が行われている。また、Goldberg (2019) では、実験による学際的な研究を引用しつつ、構文文法理論の枠組みから話者の言語知識に関する議論が整理されている。言語変化に伴う意味変化については、文法化と(間)主観化 (Traugott 1989, 1995, 2003, 2011) との関係性が議論され、考察の対象とされている。

次に、本研究の研究手法について述べる。英語研究として、本研究は記述文法を背景としている。一方、伝統的な辞書学から、伝統文法も参照して分析を進める。本研究の関連分野としては、フレイジオロジー、語法研究 (八木 2007, 住吉 2016) がある。語法研究のアプローチは「メンタル・コーパス」(Taylor 2012) の翻訳に携わった研究者も採用しており、本研究の方法論とも親和性を持つ分野である。分析時の言語データとしてコーパスが使用されるため、コーパス言語学の分野も関わりをもつ。Fukaya (1997) は、コーパスを用いて動詞派生前置詞の文法化を論じたものである。

本研究は、言語の通時研究としても位置づけられる。特に、英語史の観点から行われた動詞派生前置詞・接続詞 *provided/providing*, *save/saving*, *concerning*,

*considering, regarding, relating to, touching*等の研究 (川端 2001、児馬 2001、Rissanen 2002、秋元 2014) とともに、通時的变化のプロセスとともに共時的な分布も事例ごとに異なる動詞派生前置詞のうち、*including*の用法についての事例研究と位置づけることができる。また、(i) 20世紀における*in spite of*から*despite*への交替、(ii) *despite*が簡潔さを重視する新聞・雑誌という媒体を通して発達し、話し言葉にも浸透していったこと、を論じた菊地 (2014) とともに、「書き言葉」を中心に使用され、使用頻度の低い動詞派生前置詞という現象を分析する本研究は、言語変化を使用ジャンルの観点から考察するものである (cf. 林 2020a)。本研究は、動詞派生前置詞の主要な先行研究 (児馬 2001、川端 2001、秋元 2014) と同様に英語史分野の研究と位置づけられる。

## 2.2 理論的背景

本節では、理論的背景として、文法化のメカニズムを概観する。文法化理論は、意味論で議論されるプロトタイプ (典型事例) から拡張事例への連続的な分布、身体性 (山梨 2000) と親和性を持つ。本研究が対象とする動詞派生前置詞への文法化は、動詞という内容語から前置詞という機能語への連続的な品詞カテゴリーの変化であり、動詞に典型的に見られる特徴の喪失と、前置詞に見られる特徴の獲得と見なすことができる (林 2020a)。すなわち、動詞・前置詞の典型性 (プロトタイプ) という観点から、動詞派生前置詞という現象を捉え直していくという分析の方向性が採用されることとなる。

文法化 (grammaticalization) は、言語学的文脈において、特定の語彙項目・構文が文法的な機能を担うようになることをいう (Hopper and Traugott 2003)。代表例として動詞*go*が未来を表す文法標識*be going to*へと変化していくことがよく挙げられる。この変化には再分析 (reanalysis)、音韻縮約 (phonological reduction)、意味の漂白化 (semantic bleaching)、重層化 (layering) が伴う (Hopper and Traugott 2003、秋元 2014)。このうち、3節で行う*including*の分析に関わるものとして、2つの現象について簡単に解説すると、意味の漂白化とは、*go*の「行く」という動詞的意味が失われ、時間を表す文法的意味へと変化していることを指し、文法化の後期に起こるとされるものである (Hopper and Traugott 2003: 98)。次に、重層化とは、文法化した形式、例えば未来標識を表す*be going to*が、既存の未来標識*will, shall*とともに共存することである (cf. 秋元 2014: 8)。動詞派生前置詞の例を見ると、文法化した動詞派生前置詞*following, concerning/regarding*は、それぞれ既存の前置詞*after, about*と共存している (Fukaya 1997: 288)。なお、文法化した-ing形前置詞と比較して、*after, about*といった既存の前置詞の生起頻度の方が高

いことが、Fukaya (1997) のコーパス調査により明らかになっている。生起頻度の高い前置詞は、書き言葉、話し言葉ともに広範に用いられる一方で、動詞派生前置詞は書き言葉を中心として使用され、動詞派生接続詞の用法を持つ*considering (that)...*等の一部のみが話し言葉においても使用される (林 2020a)。この他に、脱範疇化と主観化・間主観化という現象が分析に関連する。Fukaya (1997) は、脱範疇化 (de-categorialization) の例として(1)の例を挙げる (イタリックは筆者による)。

- (1) a. ...several VIPs amongst them lost their lives, *including* General Wladyslaw Sikorski, C-in-C of the Polish Forces and Prime Minister of the Polish Government-in-exile.  
b. Approaches have already been made to Boardman by three continental pro teams, *including* Gan and Motorola,...
- (Fukaya 1997: 291)

(1 a) の*including*は動詞であり、命を落とした several VIPsに含まれる複数の人物が、*including*の意味上の主語として直後に明示されている。一方、(1 b) の*including*は文法化しており、そのような特徴が見られない。すなわち、(1 b) は受動態であり、*including*の意味上の主語 (Approachesを行った人物) が主節の主語と一致しておらず、主節・分詞節の主語一致、という動詞的特徴が見られない。このように、語彙項目から文法形式への文法化に伴い (ここでは動詞*include*の) 形態的・統語的特性が失われていくことを脱範疇化という (cf. Hopper and Traugott 2003: 107; Hopper 1991; 秋元 2014)。

次に、文法化における主観化 (subjectification)、間主観化 (intersubjectification) について述べる。文法化における主観化とは、話されていることへの話し手の信念・態度が、客観的内容から徐々に抽象的・語用論的・対人的で話し手寄りの機能を示すようになることである (Traugott 1995: 32)。この例として、Kawabata (2003: 149) は、副詞化した*considering*が、主節により表現されていることに対する話し手のスタンスを表すことを指摘する。

- (2) <F02> with both of us working we don't do much of an evening so you know really it's just Sunday. And there's only fifty-two of those in a year. <tc text = laughs>  
<F01> <tc text = laughs> <tc text = pause>  
<tc text = sighs>

<F02> So yeah I mean I think we're doing quite well *considering*. Mum isn't having any of that but <tc text = sniffs> erm you know given that MX and I are both essentially very very lazy <tc text = laughs> people <tc text = pause> I don't think we're doing that badly really.

(BOE, ukspoken)

Kawabata (2003: 147) は、大規模コーパスThe Bank of English (BOE) から抽出した、イギリス英語の話し言葉 (ukspoken) の例文(2)を引用している。ここでは、話し手<F02>が、自分自身の平日・祝日の過ごし方を肯定的に評価しており、その理由を述べる代わりに、次の話題へと転換する前に「母には全く該当しない」とのコメントを挿入し、説明が長く冗長になることを回避している。この用法は、主に話し言葉で好まれるとされる。また、Traugott (2003: 124) は、間主観化 (intersubjectification) として、受信者の認知的スタンス、社会的アイデンティティへの話し手・聞き手の注意を符号化する意味の発達を指摘し、これは主観化 (subjectification) から生じるとし、具体例として *actually* を挙げている。

- (3) *Actually*, I will drive you to the dentist  
(Traugott 2003: 129)

(3)の*actually*は、「歯医者へ車を運転する必要はない」「誰か他の人が車で連れて行ってくれるはずだ」と考え、車を出すという自らの申し出を断られる可能性を軽減しようとする話し手・書き手の試みを表している。早瀬 (2016) は、Corpus of Contemporary American English (COCA) からの例文(4)を引用し、副詞化した *considering* がもつこの機能を論じている。(4)のイタリックは筆者による。

- (4) Dorothy does plan on being a little mean to Pete at first; she has finally learned it can be a good thing to be mean to men. Apparently they like it; it's supposed to appeal to their hunting instinct. That's why she's going to walk right by him when he first sees her and notices how attractive she is. *Considering*.  
(COCA; 早瀬 2016: 222)

(4)の*considering*は「『彼女は魅力的だ』という判断を述

べた直後に、聴者からの疑念を想定しての先制防御 (例えば『まあ魅力的といってもそこそこだけれども』) として働いている」とされる (早瀬 2016: 222)。

### 2.3 動詞派生前置詞

次に、本節では3節の分析に関わる動詞派生前置詞の特徴を概観する。動詞派生前置詞は、第一に、主に書き言葉で使用される傾向を持つ (林 2020a)。第二に、前節で見たように、*after*, *about* といった典型的な前置詞と比べて頻度が低く、音節数が多い。第三に、前置詞残留 (preposition stranding) のような典型的前置詞の特徴を持たない。第四に、前置詞へと文法化する前の動詞に見られた特徴が残っている<sup>1</sup>。第五に、前置詞的副詞を構成しないという特徴がある。

第一に、動詞派生前置詞は、主に書き言葉に生起する傾向を持つ。林 (2020a) の調査は、前置詞化した *considering* に加え、「除外」の意味を表す動詞派生前置詞 *barring*, *excluding*, *saving* が書き言葉に生起する傾向を持つことを、British National Corpus (BNC) のデータにより示している。一方、*considering* の接続詞用法は、話し言葉においても生起する傾向を持つことを指摘している。

第二の特徴として、頻度の低さが挙げられる。林 (2020a) の研究においても、*during*, *according to* といった頻度の高いものを除き、コーパス全体から用例を抽出しようとしても、多い場合で百例前後の用例を得ることしかできず、事例によっては数件しか *-ing* 形の用例を抽出できないこともある。*-ing* 形を抽出した上で、文法的な振る舞いを見て前置詞であるかの判定を行う必要がある。また、3.2.1節で後述するように、*considering* の前置詞化を典型的な前置詞 *for* への置換により検証するケースをはじめ、文法的な振る舞いだけでなく、意味の漂白化も踏まえた母語話者の内省に基づく検証も必要となる。多くの用例を抽出した場合、このような質的な検証が困難となるため、抽出された一部の例文について、質的に検証するというアプローチを採用する必要がある。この方法で前置詞化したとされる *using* を文法化の観点から検証したものが林 (2020b) である。

第三に、前置詞交替 (Hoffman 2011) の観点からは、動詞派生前置詞は、残留しないものの、関係詞 *which* に随伴するという特徴がある。ここで、林 (2020a: 45) による前置詞随伴の例文(5)に関する議論を参照されたい。前置詞残留の例文(6)は、筆者による作例である。

- (5) a. That is the office *at which* he works.  
(あれは彼が働いている会社です)

1 以上は、Kortmann and König (1992: 683)、秋元 (2014: 181) の指摘による。



(安藤 2005: 200)

- b. There was a very awkward silence *during* *which* we locked eyes.

(COCA)

- (6) a. That is the office *which* he works *at*.  
b. \*There was a very awkward silence *which* we locked eyes *during*.

(5 a) (6 a) に示すように、頻度が高い典型的な前置詞 *at* は前置詞交替する（すなわち、前置詞随伴・残留がともに可能である）一方、動詞派生前置詞は (5 b) のように関係詞 *which* に随伴するものの、(6 b) のように残留することができない<sup>2</sup>。林 (2020a) の調査では、*past, following, concerning, regarding, owing to, failing, notwithstanding* の随伴例が、頻度が低いものの主に書き言葉で使用されることを指摘している。一方、*during, according to* の随伴は頻度が高く話し言葉でも広く使用されることと、*including* には 1 例のみの随伴例が話し言葉に生起することが指摘されている。林 (2020a) の調査における *including* の随伴例 (p.c.) を以下に挙げる。

- (7) It's a very difficult case for a number of reasons, *including which* the parents want to take over the care and feeding.

(COCA)

第四に、動詞から前置詞への脱範疇化の過程においては、前述の (1 b) のような、主節の主語と一致していないにもかかわらず分詞節の主語が明示されない懸垂分詞 (dangling participle) 的な段階を経るものと推定される (秋元 2014: 190)。懸垂分詞は、英語史上は古くから存在したものの、18世紀から19世紀における規範主義の影響を受け、主語が一致していないのは非文法的であると糾弾されるようになったとされる (cf. 早瀬 2016: 214; Visser 1972: 1140-1141)。

第五に、秋元 (2014: 182-183) では、動詞派生前置詞は「前置詞的動詞を構成しない」として、*seek after* とは言うものの、\**seek following* という言い方がされないことに言及がなされている。

## 2.4 まとめと本研究の位置づけ

以上、2 節では、本研究の関わる背景と議論を概観してきた。最後に、3 節で行う本研究の位置づけを行う。本研究は「類似の前置詞の比較を目的とした共時的語法研究」(小西 1976: i) と位置づけられる。ただし、前

置詞の典型性を問題とするため、身体性に基づく前置詞 *on, to, over, at, by, with, up, down, out, of, for* の意味論的研究 (宗宮他 2007)、大規模コーパスを用いて前置詞 *up, under, aside* (Otani 2013), *on* 対 *over, above* 対 *below* (Horiuchi 2022) を論じた研究、認知言語学的な *by* の語法研究である平沢 (2019) の言語観とも親和性を持つ。以上の研究は、「用法基盤」的な言語観 (住吉・鈴木・西村 2019) を共有すると共に、コーパスを用いた実証的研究を行っていることが特徴である。

また、英語史の分野においては、コーパスで動詞派生前置詞 *according to, concerning, considering, following, including, owing to, regarding* の文法化を分析した Fukaya (1997) と同じアプローチを採用して *including* の共時的検討を行うものといえる。関連する動詞派生前置詞の個別事例を扱った研究では、*saving, save* (児馬 2001)、*provided/providing that* (川端 2001)、*notwithstanding* から *in spite of, despite* への交替 (Rissanen 2002) が考察されている。*in spite of* から *despite* への20世紀における交替を論じた菊地 (2014) は、20世紀に書かれた文法書の記述とは異なる現代英語の実態を指摘している (cf. 八木 2007: 170-179)。

本研究は、これらの事例研究と共に、文法化の観点から動詞派生前置詞 *including* の共時的記述研究を行うものとも位置づけられる。頻度の高い前置詞を扱う先行研究 (Otani 2013, Horiuchi 2022) とは異なり、2.3 節でみたように動詞派生前置詞は頻度が低く周縁的であるため、先行研究、記述文法、辞書の記述を出発点とする文献学 (philology) 的アプローチをとることとなる。例文の検証においては、コーパスの用例を参照しつつ、先行研究の前置詞を規定する種々の作例を用いた質的研究を行い、典型的な前置詞との違いを見る分析方法をとる (cf. 林 2020a)。

## 3. *including* の用法について

本節では、動詞派生前置詞 *including* の事例研究を行う。まず 3.1 節で、*including* に関する辞書および先行研究の記述を概観する。続く 3.2 節は事例研究であり、2 節で概観した動詞派生前置詞の特徴を踏まえ、大規模コーパスから用例を抽出し、先行研究における種々の作例を用いて検証を行う。

### 3.1 *including* に関する先行研究

分析に先立ち、*including* に関する記述を概観する。まず、辞書における記述を見ると、『リーダーズ英和辞典』『ジーニアス英和大辞典』、Oxford Dictionary of

2 \*は、容認されないことを表す。

Englishでは、*excluding*の対義語（前置詞）とされている。なお、Oxford English Dictionary (OED) 第2版には「前置詞」との記載は存在しないことから、辞書・先行研究によって品詞分類に揺れが見られることがわかる。なお、Donaldson (2021) によると、OEDの初例(8)は1648年のものとされる（イタリックは筆者による）。

- (8) Four servants died, *including* the cook.  
(Donaldson 2021: 42)

同じく17世紀の用例として、Visser (1972) は1693年のものを挙げている。

- (9) Horace possibly might seem to him, to have shown the original of all poetry in general, *including* the Grecians as well as Romans.  
(1693 Dryden, *The Satires* (Wks., ed. Scott/S)) 41;  
Visser 1972: 1219)

Fukaya (1997) では、*including*は前置詞随伴・残留しないことに加え、脱範疇化の観点からはコーパスにおいて分詞節・主節の主語不一致(1,144例)が一致(98例)より多いとされる。2.3節で確認したように、動詞派生前置詞が周辺的であることが、コーパスの頻度によって示されている。(10)にそれぞれの用例を引用する(イタリックは筆者による)。

- (10) a. They had some good players, *including* Tommy Smith and Ian Callaghan, who had both played in the 1965 final.  
[不一致]  
b. ...Nell responded, and she smiled warmly at Funny and Val, *including* them in this statement.  
[一致]  
(cf. Fukaya 1997: 295)

Görlach (1991: 109) では、*including*は*excluding*とともに、19世紀に前置詞化したとされる。内田 (2003: 109, 118) によると、動詞*including*の分詞が徐々に前置詞化する流れはHopper and Traugott (2003) の文法化に沿った変化であり、*including*の後置用法は情報散文において頻度が高いとされる<sup>3</sup>。以下のThe Freiburg—

LOB Corpus of British Englishからの例文(11)を参照されたい。なお、イタリックは筆者によるものである。

- (11) More than 540 took part in the march, *including* teams and individuals.  
(FLOB; 内田 2003: 112)

(11)の*including*は「540以上の参加者はチームか個人のいずれかであって、ほかの参加形態はない」(内田 2003: 112) という関係を表している。

また、林 (2020a) では、先行研究・辞書から収集した動詞派生前置詞37例について、話者の内省に基づく質的調査と、コーパスの頻度に基づく事例研究を行っている。その中でも、*including*の前置詞性に関しては、(i) 分裂文 (cleft sentence)、(ii) 強意副詞*right*との共起、(iii) 前置詞随伴、による検証が行われている。特に (i) (ii) の観点からは、5段階による母語話者への容認度調査に基づき、前置詞性が算出されている。(i) では2.1/5.0, (ii) では3.0/5.0という結果が出ており、(ii) の観点からは高い前置詞性をもつと述べられている。

以上、*including*に関する先行研究の記述を概観してきた。先行研究では、*including*が通時的に観察されるという記述に加え、書き言葉(プレス・学術分野)における用法について分析がなされている。また、他の動詞派生前置詞との比較も行われている。しかし、Donaldson (2021: 41) が指摘するように、動詞派生前置詞全般を「前置詞性」という観点から包括的に規定することを試みた林 (2020a) のようなアプローチでは、*including*という個別事例のみに特徴的な用法を記述するには不十分である。また、内田 (2003) のようなコーパスを用いて分類を試みた先行研究も、*including*の用法そのものについての微細な振る舞いや、(1a) (1b) の用法間に見られるような動詞から前置詞へのカテゴリーの連続性に見られる言語変化の揺らぎを規定するには限界がある。従って、本研究では、現代アメリカ英語の大規模コーパス(COCA)から抽出したデータに加え、アメリカ英語を母語とする話者の内省に基づき質的分析を行い、*including*の共時的な振る舞いを明らかにする。

### 3.2 事例研究

以上を踏まえ、本論文では協力者の母語がアメリカ英語であるため、COCAを言語データとして*including*の事例研究を行う<sup>4</sup>。コーパスの事例を抽出して、文法化に

3 情報散文 (informative prose) として、内田 (2003) はプレス・学術分野のものを調査している。

4 COCAで*including*と検索すると261,776件がヒットする(2024/01/05現在)。これらの中には、動詞・動名詞・現在分詞・分詞構文・前置詞・副詞等の広範な用法が存在する。全体に占める割合を示すには、まず*including*の各振る舞いについての品詞分類を行い、前置詞と分類されるものが何例であるか、手作業で抽出せねばならない。特に、前置詞・動詞の境界的な用例の分類が難しく、判断が難しい場合には作例による検証が必要となることがある。*including*の全用法について、この作業を行うことは現実的ではない。話

おける動詞から前置詞への連続的な変化に注目し、2.3節で概観した各特徴について典型的な（頻度の高い）前置詞の振る舞いと比較検討しながら分析を進める。「前置詞としての典型性（プロトタイプ）」とは何かについては、種々の作例（林 2020a）を援用し、周遍的な前置詞との比較により捉え直していく。具体的には、(i) 典型的な前置詞への置換、(ii) 等位接続、(iii) 強意副詞 *right* との共起、に注目して分析を行い、(iv)（間）主観化との関係を考察する。最後に、(v) 前置詞的副詞の用法についても議論を行い、話し言葉への拡張についての可能性を論じる。データの検証では、アメリカ英語を母語とする話者の内省による検討も行う。内省による調査は、事前に研究目的を伝達して実施し、データの公表についても承諾を得て既に学会発表を終えている。

### 3.2.1 前置詞への置換による検証

重層化の観点から、動詞派生前置詞は頻度の高い前置詞と共存している。例えば、*about* 対 *concerning*, *regarding* がそれにあたり、このような動詞派生前置詞は、特定の文脈において、頻度の高い前置詞に置換することが可能である。このことは、文法化に伴い意味の漂白化が進み、動詞か前置詞か、判定が難しい用例についての検証に援用することができる。代表例として、前置詞化するに伴い、並行して意味の漂白化が進む *considering* が挙げられる<sup>5</sup>。(12)の *considering* は、前置詞 *for* に置換できる (cf. 林 2020a: 47)。

- (12) *Considering* his age, he looks very young.  
 (年齢のわりには、彼はとても若く見える)  
 (安藤 2005: 622)

同様の観点から、調査協力者の内省によると、COCAで抽出した55例のうち、話し言葉 (SPOK) の例(13)の *including* は、前置詞 *among* に置換可能である。

- (13) It's a very difficult case for a number of reasons, *including* which the parents want to take over the care and feeding. (= (7))  
 (COCA; SPOK, 2005)

*including* の場合、動詞 *include* の語義が保たれていることから、ここで前置詞へ置換できるということが、*considering* の例と同様に意味の漂白化を伴っている

ことを直接意味するかについては検討が必要である。Fukaya (1997) では、漂白化と考えられる例(14)が指摘されている (例文のイタリックは筆者による)。

- (14) a. Western diplomats say that the resolution will gain only six votes, *including* those of the US and the sponsoring countries — Cape Verde, Djibouti, Pakistan, Morocco and Venezuela.  
 b. According to the McNamara plan, government power would be vested in a five-strong Executive Joint Authority, *including* two national government representatives and three from Northern Ireland itself, elected by proportional representation.  
 (Fukaya 1997: 296)

Fukaya (1997) によると、(14)の前置詞 *including* は、*namely, specifically* の意味に近いとされる。すなわち、文法化の結果、動詞 *include* の 'having part of a whole' という意味が、前置詞への文法化に伴い 'having' へと縮小した (reduced to) と考えられるという (Fukaya 1997: 296)。Fukaya (1997) では明言されていなかったが、これらの点は前置詞 *including* への文法化が意味の漂白化を伴うことを示唆する。

### 3.2.2 等位接続

次に、林 (2020a: 62) では、(15)のような前置詞の等位接続に注目した議論が注目されている。

- (15) He rushed *in* and *down* the stairs.  
 (丸田・平田 2001: 123)

ここでは、前置詞 *in* と *down* が *and* で等位接続されている。すなわち、典型的な前置詞と等位接続できれば、等しい文法的資格 (すなわち、前置詞としての性質) をもつものと判定ができるということである。この観点から、*including* と動詞派生前置詞 *excluding* の等位接続例や、「除外」の意味を持つ典型的な前置詞 (頻度の高い前置詞) *without, except, but* との等位接続が見られるか、COCAで調査を行った。ここでは、*and* だけでなく、等位接続詞 *but, or, so* との接続を検討していく。

者に協力を依頼する場合であっても、多くの用例を一貫した基準で分類することは難しく混乱が生じる可能性が高いため、調査件数を限定することが望ましい。このことから、本研究では、動詞派生前置詞の先行研究で指摘されている用法に加え、前置詞への置換、等位接続による質的考察を行った。

5 前置詞 *for* に置換できないのは、動詞 *consider* の意味が漂白化しておらず、主節・分詞節の意味上の主語が一致しており、分詞節の意味上の主語が前景化している等の場合である (林 2023)。



まず、動詞派生前置詞*excluding*との等位接続例を見ることで、動詞派生前置詞としての資格をもつ*including*について検討する。*including or excluding*と検索した結果、11例がヒットした。(16)は、書き言葉のうち、アカデミック(学術論文; ACAD)に見られる例である。

- (16) In pairwise interlocus LD analysis of multilocus sequences *including or excluding* gp60, strong but incomplete LD ( $D'Y = 0.9342 + 0.0001X$  or  $D'Y = 0.9302 + 0.0010X$ ) was observed in subtype IbA10G2, suggesting recombination within this subtype.  
(COCA; ACAD, 2013)

COCAにおいては、「除外」の前置詞*without, except, but*等との共起例は観察されなかった。従って、COCAのデータに限れば、*including*は、*excluding*とのみ<sup>6</sup>で等位接続可能であった。この結果を踏まえ、アメリカ英語を母語とする話者の内省に基づく検討を行うと、*and*による*excluding*との等位接続は不可であり、(17)のような組み合わせであれば可能とのことであった<sup>6</sup>。また、話者の内省によると、(13)のような法律文書で使用されることが予想されるという<sup>7</sup>。

- (17) a. \**including* and *excluding*  
b. [*including* NP, but *excluding* NP]  
c. [*including* NP but *without* NP]

(17)の各例は、前置詞句 [*including* + NP] が等位接続されている。等位接続は、等しい文法的単位によるため、節と節、語(句)と語(句)、といった様々な単位での接続がありうる。(17b)は、*including*と動詞派生前置詞*excluding*が、(17c)は*including*が前置詞*without*と等しい文法的資格であることを示している。以上より、(16)(17)の*including*は、ともに書き言葉で使用される傾向を持つ。

以上、本節では、*including*の等位接続の用例について、コーパスからの用例と、話者の内省により考察を行った。コーパスの調査では、*excluding*との共起例(16)のみが観察され、従って典型的な前置詞との等位接続は見られないといえる。しかし、調査協力者の内省では、(17)のように等位接続による用法は可能であり、これらの共起は書き言葉で使用される文体であることが指摘された。

### 3.2.3 強意副詞*right*との共起

林(2020a)は、空間・時間的意味を持つ前置詞を識別するテストとして、(18)のように強意副詞*right*との共起が可能であることに注目する。(19)は林(2020a)が*including*の前置詞らしさ(前置詞性)を検証した例文である(19)のイタリックは筆者による)。

- (18) a. He kept on drinking *right until* midnight.  
b. She put it *right into* her pocket.  
c. The boy came *right from* the store.  
d. They kissed *right after* the ceremony.  
(Emonds 1976: 174; 林 2020a: 41)

- (19) I've got three days' holiday *right including* New Year's Day. (林 2020a: 120)

(19)の結果から、*including*は動詞派生前置詞の中では3という比較的高い前置詞性(最大値は5)をもつとされる。

以上に注目し、COCAで [*right including*] を抽出すると、前置詞と思われる*including*は1例であった。以下に用例を引用する。

- (20) That means the front seats are open for the Tea Partyers *right including* the drivers seat!!!  
(COCA; WEB, 2012)

前節では、母語話者の内省から*including*は書き言葉に親和性を持つことを述べた。(20)は、林(2020a)の容認度調査で行った作例に該当する例文が、大規模コーパスにおいても実際に確認されたことを示している。ここでの*right*は、*including the drivers seat*という語句を強調する働きを持つ。従って、ここでの*including*は前置詞であるといえる。ただし、ここでの生起ジャンルはWEBとなっており、動詞派生前置詞全般に見られる書き言葉で使用される用法が拡張したものと考えられる。WEBの言葉については改めて4節で議論を行う。

### 3.2.4 (間) 主観化

次に、Traugott(2003)の(間)主観化の観点から考察を行う。まず、Fukaya(1997)による副詞化した*considering*の用例を引用する(イタリックは筆者による)。

6 本研究での調査参加者は1名である。そのため、例文の検証については、細部にわたるコメントを得ることができている。一方、本論文で示すデータの代表性については検証の余地がある。林(2020b)が指摘するように、地域差が存在するため、本論文の記述については、追試を行う必要がある。

7 ここでの*including*は、「的確性」を表すという。Rissanen(2000)によると、*according to*の用法を中英語期まで遡ると、通時的には宗教・科学・制定法上のテキストで使用されていたとされる。本論文における「法律文書」という内省も、ここでの用法と親和性ともつ、書き言葉に通じる用法と考えられる。



- (21) My healths in good shape, *considering*. Well, I've got arthritis, like ex-players, and my hearts a bit dodgy with all those years of painkillers, but I feel fine.  
(Fukaya 1997: 292)

副詞化した*considering*の用法は、Kawabata (2003) ではTraugott (1995) のいう主観化として議論されており、早瀬 (2016) では間主観化した対人的な機能として議論されている。Fukaya (1997) では主観化との指摘はないものの、(21)の用法は、これらの用法と関わるものであろう。

この種の用法について、*including*についても検索を行った。その結果、21例見つかった。例を(22)に挙げる。

- (22) The menu at Boiling Point, a Taiwanese hot pot spot, which has several locations, *including*.  
(COCA; NEWS, 2016)

(22)の*including*は、話し手の主観的な判断を示す機能を持つと考えられる。(22)は*including*を含まずとも文として成立するが、この文の最後に*including*が添えられていることによって、ニュースの読み手（おそらくアナウンサー）による見解であることがより鮮明に伝わることとなる。視聴者（この情報を受け取る側）を意識したものと考えれば、間主観化 (Traugott 2003) した機能を持つとも考えることもできよう。

### 3.2.5 前置詞的副詞

頻度が高い*during*, *according to*の随伴が、動詞派生前置詞の多くが使用される書き言葉だけでなく、話し言葉においても使用される (林 2020a) ことから、*including*についても、書き言葉以外のジャンルで広く使用される可能性を議論する必要がある。書き言葉以外のジャンルで見ると、動詞派生前置詞が別の新しい用法を獲得する例が見られる。例えば(23)は動詞派生前置詞*following*が副詞化した話し言葉の例である。

- (23) There must have been chaos *immediately following*.  
(COCA; 2011, SPOK)
- (24) a. \*The others arrived shortly *following*.  
b. The others arrived shortly *after*.  
(Olofsson 2011: 13)

(23)の*following*は*after*に置換が可能であり、(24b)の*after*のような前置詞的副詞の例と考えられる。通例、書き言葉や規範的な用法では (24b) の*after*のように*following*を使用することはできない (24a)。しかし、規範性を欠くと感じられるものの、協力者によると話し言葉等の口語においてはこのような用法が可能とのことである。従って*including*は「書き言葉」と親和性を持つという点で動詞派生前置詞の特徴をもちつつも、口語においては(23)のように、言語変化という観点からは、前置詞化に加え、副詞化という新規な用法を獲得していることも同時に考慮する必要がある。

### 3.3 まとめ

以上、本節では、前置詞*including*の用法について、(i) 前置詞への置換、(ii) 等位接続、(iii) 強意副詞*right*との共起、(iv) (間) 主観化、(v) 前置詞的副詞、の観点から検討を行った。(i) については、前置詞*among*への置換が可能であることと、漂白化と見なしうることを論じた。(ii) では、コーパスの調査では動詞派生前置詞*excluding*と*or*で接続される例のみが観察され、典型的な前置詞との等位接続は見られなかった。一方、調査協力者の内省では、頻度の高い前置詞*without*と等位接続する、すなわち*including*が前置詞の資格をもつことが確認された。特に後者の用法は、法律文書をはじめとする書き言葉に親和性をもつと考えられることを確認した<sup>8</sup>。

(iii) については、先行研究 (林 2020a) が行った強意副詞*right*との共起例が大規模コーパスから抽出された。1例のみであるが、この例は*including*が前置詞として使用されていることを示す例であり、書き言葉からWEBへと用法が拡張した例と考えられる。(iv) については、副詞化した*considering*のように (間) 主観化の観点から位置づけられることを指摘した。(v) では*following*が\**seek following* (秋元 2014) のような用法を持たないと先行研究で指摘されていたものの、現代アメリカ英語では*following*が前置詞的副詞の用法を持つことを指摘した上で、*including*の前置詞的副詞が新規な用法を獲得していく可能性について展望を示した。

## 4. 結語

本論文では、前置詞*including*の用法を、動詞から前置詞への連続的な文法化というカテゴリー変化の観点から捉え直した。結論として以下の3点が指摘できる。第一に、*including*は、動詞派生前置詞の中では動詞としての特徴が強く保たれている例と考えられる。その

8 林 (2020b) では、地域差が見られることが指摘されている。従って、話者の年齢・出身地域等により、本論文とは異なる結果となる可能性を常に念頭に置く必要がある。

根拠として、*including*には動詞*include*の意味が強く保たれていることや、「書き言葉」以外のジャンルにおいても広く生起することが指摘できる。林 (2020a) では、*considering*の前置詞用法や、「除外」の意味を持つ *excluding, barring, saving*といった動詞派生前置詞がBNCのデータでは書き言葉に生起する傾向を持つと分析されている。一方、本論文では、*including*の用法は、書き言葉以外のジャンルにおいても用いられていることを示した。前置詞*among*への置換が可能であり、意味の漂白化 (cf. Fukuyaya 1997) と見られる用例が存在することから、前置詞への文法化を果たしたとも考えられる。なお、前置詞への置換は、(12)の*considering*が前置詞*for*に置換可能であることから前置詞化したものと判断できるが、動詞性が高い (分詞節の意味上の主語が主節と一致し、動作主性が強い、なおかつ動詞*consider*の意味が漂白化していない) と、*considering*は*for*への置換ができない (cf. 林 2020a: 47; 林 2023: 255-256)。従って、前置詞*among*に置換できる*including*は前置詞と判断すべきである。*including*は動詞*include*の意味が(3.2.1節の議論では) 漂白化したものといえるかもしれないが、それでもなお原義が強く保たれている例と考えられるだろう。第二に、前置詞随伴の例(13)と副詞化した例(2)が話し言葉であることや、強意副詞*right*と共起する*including*の前置詞句(20)がWEBで使用されていることから、*including*は書き言葉で使用される動詞派生前置詞の特徴を持ちつつも広いジャンルで使用されるといえる。林 (2020a) は、BNC で文頭に生起する動詞派生前置詞*excluding, barring, saving*が書き言葉に生起する傾向を持つと述べている。これらの用例に前置詞随伴の例は報告されておらず、この点でもCOCAを用いてアメリカ英語における*including*の用法を記述した本論文は異なる分布を示すといえる。第三に、*including*という前置詞の唯一性が指摘できる。*including*と対照的な「除外」を意味する前置詞には、頻度の高い*but, except, without*に加え、頻度の低い動詞派生前置詞*excluding, barring, saving*と多くの種類が存在する。その一方で、対照的な意味を持つ*including*には、類似した意味を持つ前置詞がない。この点で、*including*は「包含」の意味を持つ唯一の動詞派生前置詞であり、動詞的な意味が強く感じられる例でありつつも『リーダーズ英和辞典』『ジーニアス英和大辞典』やOxford Dictionary of English等では「前置詞」と分類されていると考えられる。ここに「除外」を表す前置詞と意味の非対称性 (asymmetry) をなす前置詞としての存在意義がある。

最後に、今後検討すべき課題として、生起ジャンルに関する問題を指摘する。まず、清水 (2016) では、本論

文の*including*と同様に前置詞化した*using*の「書き言葉」的傾向が指摘されている。林 (2020b) の検証からは、*using*が頻度の高い前置詞*in, on, with*に置換できることが述べられており、動詞*use*の意味が強く保たれた用法 (「使用する」という意味を持つ点では動詞的と解釈できる) とも捉えられる。典型的な前置詞は、書き言葉・話し言葉といったジャンルの区別を問わず広く使用される。従って、書き言葉のみに限らず話し言葉、NEWS、WEBにおいても*including*が観察された今回の結果については、*including*がジャンルを問わず広く使用される可能性について慎重に議論すべきと考えられる。菊地 (2014) は、20世紀後半に、*despite*の使用が簡潔性を重視するジャーナリズム、話し言葉・書き言葉へ拡大したことを指摘している。コーパスに含まれるWEBの用例については、2012年頃より「打ち言葉」(西村・黒田 2018) の影響も考える必要があるだろう。西村・黒田 (2018) によると、「打ち言葉」は話し言葉と書き言葉の中間的な性質をもつとされる<sup>9</sup>。言語分析においては、通時・共時の区分をもって動詞から前置詞への連続的な品詞カテゴリー変化を考察しつつも、通時的な変化を経て現代英語に至っていることを念頭に、パンクロニックな視点 (林 2020a: 13) をもって言語変化のダイナミズムを捉えていかねばならない。この種のアプローチは、規範性からの逸脱に注目する住吉 (2016) などの研究とともに、言語の一側面を浮き彫りにする可能性を秘めている。

## 謝辞

本研究は、日本英文学会関西支部第16回大会 (2021年12月18日) における懇話発表「*including*の語法に関して」を改題し、加筆修正を施したものである。発表時の司会を務め、発表資料の細部にわたってコメント下さった米倉よう子先生 (奈良教育大学) には、Visser (1972) による懸垂分詞構文の規範文法における議論についてもご教示頂いた。3節における英文の検討に際しては、前任校である明海大学在籍時の同僚であるKei Nakamura先生に貴重な助言を賜った。発表準備に際しては、小林裕子先生と関西英語語法文法研究会の皆様、草稿の段階では、Kei Nakamura先生、中嶋浩貴先生に、それぞれコメント頂いた。投稿・改稿に際しては、匿名の査読者の方々から貴重な指摘を受けた。ここに記して感謝申し上げる。無論、本論文における誤りは筆者の責任である。本研究は、科学研究費事業・研究活動スタート支援「英語動詞派生前置詞からみた共時性・通時性の接点：言語変化のダイナミズム」(研究課題番号：21K19991)、

9 西村・黒田 (2018) は、2ちゃんねる (当時)、LINEに見られる「打ち言葉」の「(笑)」 「w」 「草」といった「笑い」表現を分析している。

若手研究「言語変化の漸進性に関する記述研究：量的・質的アプローチの融合を目指して」（研究課題番号：23K12200）の助成を受けている。

## 参考文献

- 安藤貞雄. 2005. 『現代英文法講義』東京：開拓社.
- 秋元実治. 2014. 『増補 文法化とイディオム化』東京：ひつじ書房.
- Donaldson, James. 2021. *Control in Free Adjuncts: The “Dangling Modifier” in English*. Ph.D Thesis, The University of Edinburgh.
- Emonds, Joseph Embley. 1976. *A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, and Local Transformations*. New York: Academic Press.
- Fukaya, Teruhiko. 1997. The Emergence of *-ing* Prepositions in English: A Corpus-Based Study. In Masatomo Ukaji, Toshio Nakao, Masaru Kajita and Shuji Chiba (eds.), *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of his Eightieth Birthday*, 285-300. Tokyo: Taishukan.
- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press. (河上誓作・谷口一美・早瀬尚子・堀田優子 (訳) 『構文文法論—英語構文への認知的アプローチ—』東京：研究社, 2001.)
- Goldberg, Adele E. 2019. *Explain Me This: Creativity, Competition, and the Partial Productivity of Constructions*. Princeton: Princeton University Press. (木原恵美子・巽智子・濱野寛子 (訳) 『言えそうなのには言わないのはなぜか—構文の制約と創造性—』東京：ひつじ書房, 2021.)
- Görlach, Manfred. 1991. *Introduction to Early Modern English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 早瀬尚子. 2016. 「懸垂分詞構文から見た (inter)subjectivity と (inter)subjectification」, 中村芳久・上原聡 (編) 『ラネカーの (間) 主観性とその展開』207-229. 東京:開拓社.
- 林智昭. 2020a. 「動詞派生前置詞の共時的・通時的記述研究—文法化への意味論的アプローチ—」京都大学大学院人間・環境学研究科, 博士学位論文.
- 林智昭. 2020b. 「*using*の前置詞的用法について—文法化の観点から—」, 八木克正・神崎高明・梅咲敦子・友繁義典 (編) 『英語実証研究の最前線』164-178. 東京：開拓社.
- 林智昭. 2023. 「言語変化の認知的基盤—動詞から前置詞への文法化に注目して—」『日本認知言語学会論文集』23: 252-260.
- Hilpert, Martin. 2014. *Construction Grammar and Its Application to English*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- 平沢慎也. 2019. 『前置詞byの意味を知っているとは何を知っていることなのか—多義論から多使用論へ—』東京：くろしお出版.
- Hoffman, Thomas. 2011. *Preposition Placement in English: A Usage-based Approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hopper, Paul J. 1991. On Some Principles of Grammaticization. In Elizabeth Closs Traugott and Bernd Heine (eds.), *Approaches to Grammaticalization I*, 17-35. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott 2003. *Grammaticalization (2nd edition)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Horiuchi, Fumino. 2022. *English Prepositions in Usage Contexts: A Proposal for a Construction-Based Semantics*. Tokyo: Hituzi Syobo.
- Jespersen, Otto. 1954. *A Modern English Grammar on Historical Principles. Part V: Syntax (4<sup>th</sup> vol)*. London: George Allen & Unwin.
- 川端朋広. 2001. 「英語における動詞派生接続詞の発達と文法化—*provided/providing*の接続詞用法—」, 秋元実治 (編) 『文法化—研究と課題—』97-119. 東京：英潮社.
- Kawabata, Tomohiro. 2003. On the Development of *Considering*: The Prepositional, Conjunctive and Adverbial Usages. In Ken Nakagawa (ed.), *Studies in Modern English: The Twentieth Anniversary Publication of the Modern English Association*, 139-152. Tokyo: Eichosha.
- 菊地翔太. 2014. 「現代英語における譲歩を表す前置詞—コーパスに基づいた通時的・共時的研究—」『KLA Journal』1: 1-16.
- 児馬修. 2001. 「周辺的前置詞 (接続詞) *save, saving* の文法化」, 秋元実治 (編) 『文法化—研究と課題—』73-95. 東京：英潮社.
- 小西友七. 1976. 『英語の前置詞』東京：大修館書店.
- Kortmann, Bernd and Ekkehard König. 1992. Categorical Reanalysis: The Case of Deverbal Prepositions. *Linguistics* 30: 671-697.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University



- Press.
- 丸田忠雄・平田一郎. 2001. 『語彙範疇 (II) 名詞・形容詞・前置詞』 東京: 研究社.
- 西村綾夏・黒田一平. 2018. 「書き言葉の感情表現—インターネットスラングに見られる『笑い』—」 『日本語用論学会第20回大会発表論文集』 13: 323-326.
- Olofsson, Arne. 2011. Prepositional *Following* Revisited. *Studia Neophilologia* 83: 5-20.
- Otani, Naoki. 2013. *A Cognitive Analysis of the Grammaticalized Functions of English Prepositions: From Spatial Senses to Grammatical and Discourse Functions*. Tokyo: Kaitakusha.
- 大谷直輝. 2019. 『パーシク英語構文文法』 東京: ひつじ書房.
- Rissanen, Matti. 2000. Paths of Loan-word Grammaticalisation: The Case of *According to*. In Christiane Dalton-Puffer and Nikolas Ritt (eds.), *Words: Structure, Meaning, Function: A Festschrift for Dieter Kastovsky*, 249-262. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Rissanen, Matti. 2002. *Despite or Notwithstanding? On the Development of Concessive Prepositions in English*. In Andreas Fischer, Gunnel Tottie and Hans Martin Lehmann (eds.), *Text Types and Corpora: Studies in Honour of Udo Fries*, 191-203. Tübingen: Gunter Narr.
- 清水眞. 2016. 「英語科学技術論文における能動態および受動態」 『東京理科大学紀要 (教養編)』 48: 195-211.
- 宗宮喜代子・石井康毅・鈴木梓・大谷直輝. 2007. 『道を歩けば前置詞がわかる』 東京: くろしお出版.
- 住吉誠. 2016. 『談話の言葉2 規範からの解放』 東京: 研究社.
- 住吉誠・鈴木亨・西村義樹 (編) 2019. 『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』 東京: 開拓社.
- Taylor, John R. 2002. *Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Taylor, John R. 2012. *The Mental Corpus: How Language is Represented in the Mind*. Oxford: Oxford University Press. (西村義樹・平沢慎也・長谷川明香・大堀壽夫 (編訳) 『メンタル・コーパス—母語話者の頭の中には何があるのか—』 東京: ひつじ書房, 2017.)
- Traugott, Elizabeth Closs. 1989. On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change. *Language* 65: 31-55.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1995. Subjectification in Grammaticalisation. In Dieter Stein and Susan Wright (eds.), *Subjectivity and Subjectivisation*, 31-54. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth Closs. 2003. From Subjectification to Intersubjectification. In Raymond Hickey (ed.), *Motives for Language Change*, 124-139. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth Closs. 2011. 「文法化と (間) 主観化」, 高田博行・椎名美智・小野寺典子 (編) 『歴史語用論入門—過去のコミュニケーションを復元する—』 59-70. 東京: 大修館書店.
- Traugott, Elizabeth Closs and Graeme Trousdale. 2013. *Constructionalization and Constructional Changes*. Oxford: Oxford University Press.
- 内田充美. 2003. 「Brown, LOB, FROWN, FLOBコーパスの-ing型前置詞—includingの用法を中心に—」 『女子大文学 英語学英米文学篇』 4: 101-122.
- Visser, Frederik Theodor. 1972. *An Historical Syntax of the English Language (2nd Impression). Part II. Syntactical Units with One Verb*. Leiden: Brill.
- 八木克正. 2007. 『世界に通用しない英語 あなたの教室英語、大丈夫?』 東京: 開拓社.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 東京: くろしお出版.

## コーパス・辞書等

- Davies, Mark. 2008-. *The Corpus of Contemporary American English (COCA)*. Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/>
- 小西友七・南出康世 (編) 2001. 『ジーニアス英和大辞典』 東京: 大修館書店.
- Oxford Dictionary of English (2nd edition)*. 2003. Oxford: Oxford University Press.
- Oxford English Dictionary (2nd edition, CD-ROM Ver. 4.0)*. 2009. Oxford University Press.
- 高橋作太郎 (編) 2012. 『リーダーズ英和辞典』 (第3版) 東京: 研究社.